

# 題1：ハイリスク新生児への母乳栄養推進

松戸市立病院新生児科 竹内 豊

## 目 的

母乳栄養のもつ意義の重要さは今日では広く知られていることであるが、未熟児であったり何らかの疾病のために長期間病院に収容されている新生児の場合には母のもとに居ないだけにこの大切な母乳の投与も受けられない可能性も高い。昭和58年度に報告した如く全国の主要新生児未熟児施設での調査でも、数ヶ所を除いては母乳の投与されている率は75%を超えてはいなかった。

私達の施設でも70%弱の母乳投与率であった。そこで、この3年間に対策を講じて母乳栄養率を増加させること、母乳が投与されないケースではどのような理由で投与されなかったのかを調査することにした。

## 方 法

母乳栄養推進の方法として

- ① 母乳の必要性を母に説くこと（搬送に当たった医師・看護婦が母に会って児の状態を説明し、母乳の運ばれてくるのを待っている旨を説く。）
- ② 同じく母乳の必要性を父に説明する。
- ③ 産科に乳房の管理を改めて依頼。
- ④ 産科医の判断だけで母乳を止めることのないように確認する。
- ⑤ 搾乳器、滅菌哺乳びん、運搬用クーラーなどを病院から供給貸与する。

などの対策を行った。

さらに、退院時に母または父に質問して、母乳の運搬状況や分泌の状態などについて調査を行った。

## 結 果

母乳の投与状況を表1に示す。

対象患者は日齢3未満に入院して7日以上滞在した症例である。初年度1983年(昭和58年)の母乳投与率は69.5%であったのが年をおうごとに増加して1985年(昭和60年)には90%に到達

している。体重群別にみると未熟児とりわけ出生体重の極く小さなグループの投与率が高く、成熟児のグループが各年度とも低い。このことは昭和59年度報告でも述べたように、小児外科症例、重症仮死後脳症症例、染色体異常を初めとする多発奇型症例などがこのグループに属することが多く母児間の絆をうまく保つように出来なかったことが危惧される。

母乳が投与されなかった症例について、昭和60年度には児の退院時に母からその理由を直接聴取した。

表2は母乳がよく分泌していた母について非投与の理由を考察したものである。

母の抗神経薬内服、DIC、代謝異常など止むを得ぬ理由もあるが、一方では運び手が無い、遠過ぎる、わざわざ運ぶ必要を感じないなどの理由もあって残念な思いをした。

母乳が殆ど出なかったと述べた母20例についてその理由をたずねてみると表3のようになる。

産科施設で4例が母乳を止められている。これらの理由はいずれも母乳禁止の理由にはならないので今後の確認が必要である。児のことが心配で仕方なかったと答えた母の場合、その児は必ずしも重篤な状態ではなかったので、私達病院のスタッフの説明、指導の不足とも云える。もっときめ細かな対応が必要と反省させられる。

原因は判らないと答えたものは8例。対象の1.5%に相当する。山内によればこのようなケースは母体の0.5%未満と云われるだけに、“児の入院”ということが分娩直後の母に与えるストレスとなっているのかも知れない。やはり、児の入院に際しての母に対する大切な説明・指導項目として今後活かして行きたい。

## 考 察

母乳栄養を推進するために最も重要なことは産科施設、新生児収容施設のスタッフの心がまえで

あろう。分娩後児の入院というアクシデントで気持の沈んだ母に対して周囲の人々の励ましと母乳栄養の必要性の説明は不可欠のものである。このた

めには我々周産期医療に従事するスタッフの一人一人がこのことを十分に認識することが最も必要なことである。

表1

新生児科入院児への母乳運搬状況

出生体重群 年度	1000				計
	≤1000	~1499	1500 ~2499	2500≤	
1983	<u>15</u> 17 (88.2)	<u>40</u> 48 (83.3)	<u>121</u> 178 (68.0)	<u>131</u> 200 (65.5)	<u>308</u> 443 (69.5)
1984	<u>14</u> 15 (93.3)	<u>55</u> 61 (90.2)	<u>217</u> 235 (92.3)	<u>209</u> 255 (82.0)	<u>495</u> 566 (87.5)
1985 1~11	<u>8</u> 8 (100)	<u>39</u> 42 (92.9)	<u>212</u> 224 (94.6)	<u>232</u> 260 (89.2)	<u>491</u> 534 (91.9)

母乳運搬数  
対象患者数 (%)

表2

母乳非投与の主な理由

母乳が良く出た母23例について

母の抗神経薬内服	3
母の疾病	
DIC	1
産褥の感染・入院治療	2
重症妊娠中毒症・子癇	1
帝王切開	2
母の代謝異常	1
運び手が無くて	4
遠過ぎて	4
児の飢餓が長く母乳が止まった	2
運ぶ必要を感じなかった	3

表3

母乳非投与の主な理由

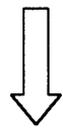
母乳がほとんど出なかった母20例について

児が入院して産科で止めるように勧められた (早発黄疸2, 兔唇1, HBcarrier 1)	4
児が心配で乳が強ってこなかった	4
自分が病気で乳が出なかった (敗血症2, 帝王切開1, 子癇発作1)	4
原因は判らないが出なかった	8



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 目的

母乳栄養のもつ意義の重要性は今日では広く知られていることであるが、未熟児であったり何らかの疾病のために長期間病院に収容されている新生児の場合には母のもとに居ないだけにこの大切な母乳の投与も受けられない可能性も高い。昭和58年度に報告した如く全国の主要新生児未熟児施設での調査でも、数ヶ所を除いては母乳の投与されている率は75%を超えてはいなかった。

私達の施設でも70%弱の母乳投与率であった。そこで、この3年間に対策を講じて母乳栄養率を増加させること、母乳が投与されないケースではどのような理由で投与されなかったのかを調査することにした。